

消費文化から明末という時代区分を再検討する

荒武 達朗

本書の著者、巫仁恕氏は現在台湾の中央研究院近代史研究所に奉職される若手研究者である。明代の社会経済史を主要な研究領域とし、一九九六年に博士論文『明清城市民変研究——伝統中国城市群衆集体行動之分析』（台湾大学歴史学研究所）を提出後、社会史、文化史に関する論考を世に問うてこられた。氏には既に前著『奢侈的女人——明清時期江南婦女の消費文化』（三民書局、二〇〇五年）があり、消費文化を軸として明末社会の諸相を一般読者向けに分かりやすく解説している。前著は従来注目されてこなかった女性の果たした役割に重点をおいている点がユニークであり、併せて一読を勧めたい。

本書『品味奢華——晚明的消費社会与

士大夫』では前著をふまえ、より長いタイムスパンをとった議論が展開されている。明初の安定的な社会体制が明中期から明末にいたり如何に変容し、そしてそれが清代へとどのように連続するののか。その展開の中で明末という時期はどのような性格と意義を具えているのか。このような課題を本書の根底にある問題意識として窺うことができる。本書はモノの消費という行為、そしてそれが端的に顕在化する奢侈風潮の蔓延、及びそれに対する各階層（中でも士大夫に重点がおかれる）の動向をモチーフとして、明末社会の姿を描出する。このような手法は、ブローデルなど社会史の影響を受けており、それ故に「導論——従生産的研究到消費的研究」では西洋史学、社会学、文

巫仁恕著

品味奢華

——晚明的消費社会与士大夫



聯經出版公司
2007年 [4536円]

化人類学の多くの成果の吸収と応用が試みられている。ただし本書は、中国史外の学界で構築された理論を無批判に導入するものではない。各章を通覧すれば実録、地方志、文集、筆記小説の他、分家文書その他檔案類を駆使し、豊富な事例をもって歴史を語らせるという姿勢で貫かれていることが看取される。本書は一種の博物誌の様相を呈しており、この高い実証性を本書第一の価値としておきたい。

以下、各章の紹介に入ろう。第一章「消費社会的形成」は、第二章以降の各論に入る前に提示された明末社会のスケッチである。一五世紀から一六世紀にかけて、

江南の都市を中心に奢侈風潮が発生、嘉靖年間（一五二一—一五六六）にはとどめようのないものとなった。さらに万暦年間（一五七三—一六一九）に至るとそれは江南から中国各地へ、都市から農村へと浸透した。著者はこれを前代までの突発的かつ一部に局限されたものから社会全体に拡大した一種の「消費社会」の形成と評価する。これは一八世紀のイギリスでおこった消費革命と類似しているという。一六世紀中国では、全国市場形成、世界経済への包摂、銀の流入、都市化、そしてこれらに帯同される経済の未曾有の活性化という事態が進展した。この活況の中で人々の収入と就業機会が増加したこと（前著からのスタンスであるが、女性のそれも十分に強調すべきであるという）、人びとの欲望に応えるサービス産業が勃興したこと、これらが社会全体の消費をボトムアップしたことが改めて確認される。同時期に奴僕ですら主人を凌駕するというような身分感覚・秩序・制度の動揺が頻繁に発生したことは、広く知

られる事実である。この変動に対して士大夫層がいかなる新たな秩序観の構築を模索していたかについては、これは本書の重要な論点であるので後述する。

つづいて結論までの構成を紹介する。

第二章「消費与権力象徴——以乗輿文化為例」

第三章「流行時尚的形成——以服飾文化為例」

第四章「消費品味与身分区分——以旅遊文化為例」

第五章「物的商品化与特殊化——以家具文化為例」

第六章「文人品味的演化与延續——以飲食文化為例」

各章は副題に記される輿、服飾、旅遊、家具、飲食という消費の項目をそれぞれ専門的に扱う。この構成は明末の社会と文化、そこに生きる人びとを立体的に照射するという効果をうみだしている。服飾（第三章）、旅遊（第四章）、家具（第五章）を例に歴史的展開を改めて述べると、明初「樸素守制」と称された服飾は単なる

中国関係専門店 東方書店〔店舗のご案内〕 ご来店をお待ちしております	
JR水道橋 JR茗茶の水駅 明名大学 駿河台地下交差点 三信堂書店 東京書店 すずらん通り 白鳥通り 御園通り 地下鉄神保町駅 A7出口 地下鉄神保町駅 東京店舗	地下鉄江坂駅 5号出口より徒歩5分（JR新大阪駅より地下鉄御堂筋線で2駅目） 関西店舗 ※駐車場あり
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-3 TEL:03-3294-1001 / FAX:03-3294-1003 営業時間：10時～19時（月～土）/12時～18時（日祭）	〒564-0063 大阪府吹田市江坂町2-6-1 TEL:06-6337-4760 / FAX:06-6337-4762 営業時間：10時～18時/土日祭休

生活必需品の域を超えなかったのだが、明末にいたって奢侈へと流れていった。商工業の成長・織物価格の下落を背景に、ある様式の流行、ファッションが次々と生まれめまぐるしくうつりかわった(第三章)。人びとの娯楽もまた変化した。廟会や進香を理由として寺廟に参拝、或いは都市を観光する人々が出現、旅遊——目的地に赴く旅、行ではなく、それ自体を愉しみとする旅、遊、文化——は普遍化、大衆化した。この新たな消費文化は、新たなサービス産業の創生をうながした(第四章)。家具もまた多様化、奢侈なものへとかわり、それに伴って市場における商品として扱われ、家具産業が成長、人々の所有する家具の種類・数量もまた増加した(第五章)。余談ながら我々が中国観光の中で、明清のもの、と説明され、中国的だ、と感じる建築物・調度品は、正確には、この時期以降のものであることが多い。

前述の通り消費の大衆化、奢侈の横行への士大夫の対応が本書の重要な論点の

一つである。その例を第二章と第三章にみれば、輜は単なる交通手段ではなく、本来は身分・官位により形式や輜夫の数が制度化された政治的意味合いを備えたものだった。明末に身分規定は急速に崩れ、度重なる禁令にもかかわらず、士大夫の模倣や僭越なるものが人々の間に広がった(第二章)。この世相の変化に

士大夫はどのように反応したか。今一度士大夫のおかれていた状況から説き起せば、明中期から明末にかけて、経済活動により実力を蓄えた商人層が科挙を経ず捐納によって官位につくようになっていた。これは商人と士大夫が一体化していく「士商相混」という状況の一端であった。一方では官途に就くことがさらに困難となった下層士大夫層も生み出されていた。彼らが中心となった政治運動はよく知られているが、本書は彼らが生み出した社会の新たな風潮に叙述の力点をおく。僭越なるものを禁止し、身分制度を守るべきことを主張しつつも、明初の重農抑商の精神に復古することはもはや不

可能であった。そこで新たな「雅と俗の分」を創造し、人びとと自らの服飾などの「品味(品格)」の違いを強調することで自らの身分の排他性を維持しようとしたのである(第三章)。

以上のような士大夫が創造した新たな「雅」「華」の具体的実践例が第四章、第五章で詳しく論じられる。大衆化した旅遊とは別に、士大夫にとつての旅遊は「雅俗之辨」、自らとそれ以外の人々を分かちつ新たな象徴的な区分をも意味していた。俗と分かちつため遊具を備えるなど「遊道」という理論化も行われた(第四章)。家具もまた士と庶、雅と俗を分かちつ指標となった。多くの士大夫は素樸なものこそが古制に合致するものと考え、富裕層の所有する豪華な家具を嫌った。質素な家具を愛好し所有することで精神的な雅俗の分を保とうとしたのである(第五章)。このような新たな「分」の設定、新たな秩序形成という図式は、社会史・文化史における本書の論点として注目すべきである。

さて明末に成立した消費文化と士大夫層の対応は、清代にどのように連続するのだろうか。第六章は飲食文化を軸にこの問題を論ずる。従来の研究は清代には社会の安定の結果、モノの消費の象徴的意義が弱化したとする。対して本書は清初の王朝交替の混乱の中で短期の衰退がみられることは事実であるが、ほどなく江南の都市のみならずその他の地域の都市、農村を問わず明末に似た状況が復活したとする。著者はここに明末から清代への連続性を見出す。ただし料理は単純かつ素樸なものが多いが、むしろこれを「雅」とする点で前述のような「俗」との区分が新たに設定されたのである。一方で食譜などの書籍は明末以上に大量に刊行され、その味や香りを表現する語彙は複雑化、多様化している。清代に衰退の局面をむかえたというよりはむしろその奢侈の「成熟」をむかえた、という印象を読者は受けるだろう。

本書が明末という時期を切り取り、その社会と文化を多角的に論ずることは繰

り返すまでもない。社会史・文化史における本書の位置づけについては専論が待たれる。紙幅も尽きつつあるので、ここで評者の観点から簡単に三点コメントをつけておきたい。第一に明末から清代にかけての連続性。我々が普段より口にする「明清」という時代の性格、そこに生きていた人びとの暮らしの痕跡は、いつ形成されたものか。本書を通読する者は、それが明中期から明末にかけての時期以降に出現したことに気付く。この分水嶺は、かつて時代区分をめぐる論争において生産関係の変化に基づき設定された明末という画期と符合している。この一致は興味深い。第二に奢侈風潮の背景。我々は歴史的事実として明末という沸騰するような時代の世相を知っている。だが何故それが明末に急速に烈しく拡がったのか。銀の流入を表象とする経済の活性化はもちろん重要な要素ではあるが、それは奢侈を可能とする状況の説明にはなっても、人びとがわれさきに走り出す動機の説明となりうるだろうか。実は著

者は一九九六年提出の博士論文においては変動下の群衆の行動分析を試みている。この観点に立脚した著者の見解を改めて拝聴したい。第三に中国の消費革命を世界史上に位置づけるという試みについて。イギリスの消費革命が産業化を牽引していくのに対して、何故これに先行した中国のそれは何も生み出さなかったのか。あるいは中国をいかなる方向へと導いたのか。巫氏の問題設定からも窺い知れるように、これは中国史のみならず世界史上の大問題であろう。これら三点については本書の直接意図するところではないので解答が用意されていないのは当然であるが、著者により今後何らかの見解が示されることを期待している。本書が膨大な資料に基づいて実証を進められたことに素直に敬服し、著者の次回作を楽しみにしつつ筆を措くこととする。

(徳島大学)